

を得て報告し度いと考へて居る。

第4章 結 言

私達は第1報及び第2報の實驗結果を綜合して次のやうな結論に到達した。

1. 「マウス」の飢餓發生並に死亡に對し骨髓食はその生たると加熱したるとを問はず、又赤色髓たると黄色髓たるとを問はず防禦的効果あり、特に加熱したものに於て一層顯著である。

生肝臟及び生脾臟は效果なく、特に後者は反つて可成りの悪影響がある。

2. 飢餓状態にある「マウス」の恢復に及ぼす影響を見るに骨髓はやはり顯著な効果がある。

但しこの場合生黄色髓のみは餘り成績がよ

くない。生肝臟は可成り良好、生脾臟及び生筋肉は反つて悪影響がある。

3. 飢餓時「マウス」の血液所見は軽度の貧血、高度の白血球減少症あり、淋巴球の百分率は減じ反面中性嗜好が増す。尙「エオジン」嗜好の消失を來すものである。

4. 飢餓「マウス」の血液所見の改善は赤色髓投與の場合最も顯著であり、次で生肝臟であり黄色髓では成績がよくない。但し生脾臟並に生筋群「マウス」は餘りに早く死亡してしまつたので検査出來なかつた。

(昭和23年1月10日脱稿)

摺筆するに當り親しく御校閲を賜つた恩師北山教授に深甚の謝意を表すると共に、本研究は文部省科學研究費の補助を受けたもので、記して感謝の意を表する。

文 献

1) 阿部：日本血液學雜誌，4卷，389頁，昭和15年。 2) 岡野：衛生學傳染病學雜誌，27卷，30頁及61頁，昭和6年。 3) 黒田：戰時醫學，2卷，9號，9頁，昭和20年。 4) 全人・綜合醫學，3卷，13頁，昭和21年。 5) 坂田：日本微生物病理學雜誌，19卷，883頁，大正14年。 6) 志眞：臨床病理血液學雜誌，2卷，223頁，昭和8年。 7) 下坂：日本內分泌學雜誌，17卷，102頁，昭和16年。 8) 白井，安藤共著：實驗動物の實際，440頁及び442頁，昭和8年，金原商店發行。 9) 得田：東北醫學會雜誌，8卷，450頁，大正13年。 10) 中村：日新醫學，14卷，419頁，大正13年。 11) 宮崎

生學傳染病學雜誌，35卷，183頁，昭和14年。 12) Borchardt：D. m. W., Nr. 13, S. 521, 1930. 13) Giffin and Watkins. J. A. M. A., Vol. XCV, P. 587, 1930. 14) Howe and Hawk：A. J. of Physiol., Vol 30, P. 174, 1911. 15) Josey and Lawrence：Folia Haematol., B. 48, P. 303, 1932. 16) Kenthe：D. m. W., Nr. 15, S. 588, 1907. 17) Knorr：Handbuch path. Organismen. Bd. 3, S. 1, 1930. 18) Leake, C. D., and Leake, E. W.：J. Pharmacol. exper. therap., Vol. 22, P. 75 (Sept.), 1923.

淋疾に對する「トリアノン」の效果並に其副作用に就て

第2編 「トリアノン」の副作用に就て

岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室 (主任 根岸教授)

醫學博士 石 天 之 樞

専門部講師 醫學士 大 村 順 一

第1章 緒 言

「トリアノン」の中毒症狀に對する恐怖の爲、臨床醫家が本劑の使用を甚だしく躊躇して居る。其の中毒に對する杞憂の存する間は

本劑の無差別的作用は防止され得るも、本劑の處方により始めて治癒し得たであらう患者(例へば淋疾患者)に、或は一命を取り止め得たであらう患者(例へば肺炎患者)に本劑

を使用し得なかつたりする事もあり得る。吾人が若し本劑の合理的使用(治療)を行はんとする場合には恐怖心よりも寧ろ理性に訴へて其の起り得べき中毒症を早期に發見し、以て治療經過の惡化を未然に防止せざるべからざるものなり。此の爲には吾人は本劑の各種の副作用を研究し、之を悉知する事最も緊要なり。余等の本研究を行へる所以も亦實に此所に存す。幸に諸賢の御教示と御批判とを乞はんとするものなり。

第2章 材料並に方法

昭招15年以降18年迄滿4ケ年間、岡山醫科大學皮膚科泌尿器科並に石の小院に於て「トリアノン」に依り加療せる急性及び亞急性淋疾患56例に就き觀察せり。1日の服用量は「トリアノン」3.0g加重曹3.0g(分三)にして局所療法(過滿俺酸加里洗滌、「ヴィタルゴール」注入)を併用せり。但し同劑服用中は他の一切の注射を行はず。(第1編第1,2及び3表参照)尙ほ追加例4例は其の表中に記せる事項に就き之を吟味せり。

第3章 實驗例

淋菌消失を証明したる諸例第1編1,2及び3表に於てトリアノン服用中副作用を起せるもの19例並びに追加4例計23例を一括して述ぶ可し。

第1編第1群に於て13例中5例に副作用見られたり。即ち胃腸障礙に皮疹を併發せしものは3.0g服用者1例,15.0g服用者1例,計2例にして、只胃腸障害のみ起りしものは9.0g服用者2例,頭痛のみ起せしものは15.0g服用者1例なり。

第1編第2群に於ては23例中9例に於て副作用見られたり。即ち胃腸障礙のみ見られしものは6.0g服用者4例,9.0g服用者2例計6例,其中1例は更に9.0g服用せしめたる所、胃腸障礙と共に血尿を併發せり。胃腸障礙,頭痛,倦怠等の見られしものは6.0g服用者1例,胃腸障礙,頭痛,倦怠に發熱を併發せしものは24.0g服用者1例,「トリアノン結晶」多量見られしは6.0g服用者1例なり。

「トリアノン」服用量と副作用

	年齢 性 格 養	第1回服用時	次回服用時	次回服用時	次回服用時	備 考
第1群	1 男38中中 (13)	3.0g 服用の晩より 1) 食慾減退 2) 癢痒性扁平疹, 蕁麻疹, 點狀出血				4日にて皮疹消褪
	2 男33強佳 (9)	3.0g (—)	12.0g (頭痛)			
	3 男30中中 (8)	3.0g (—)	3.0g (—)	3.0g (悪心, 嘔吐)		
	4 男25中中 (7)	3.0g (—)	3.0g (—)	3.0g (食慾減退)		
第2群	5 男26強佳 (6)	3.0g (—)	3.0g (—)	3.0g (—)	15.0g 1) 食慾減退 2) 嘔吐 3) 發熱38° 4) 紅斑 5) 試驗: 全身發赤, 發熱37.1°	2日にて皮疹消褪

第2群	1 (11) 男 48 強佳	6.0 g (食慾減退, 嘔吐, 下痢)					
	2 (6) 男 33 中中	6.0 g (「トリアノン」結晶多量)					
	3 (17) 男 27 強佳	6.0 g (嘔氣)					
	4 (7) 男 31 強佳	6.0 g (—)	3.0 g (食慾減退)				
	5 (23) 男 58 中中	6.0 g (—)	3.0 g (食慾減退)				
	6 (18) 男 22 中中	6.0 g (食慾著しく減退)	9.0 g (—)				
	7 (21) 男 47 中中	6.0 g (食慾減退, 頭痛倦怠)	12.0 g (—)				
	8 男 25 強佳 (9)	6.0 g (—)	6.0 g (—)	12.0 g 1) 食慾減退 2) 頭痛倦怠 3) 發熱37.7° 4) 麻疹様發疹 5) 試驗: 頭痛倦怠, 發疹			6日後皮疹消褪
	9 男 19 中中 (10)	6.0 g (嘔吐)	9.0 g 1) 嘔吐 2) 終末血尿, 終末疼痛 3) 尿中赤血球(卅), 蛋白(卅)				
第3群	1 (14) 男 40 強佳	9.0 g (食慾減退)					
	2 (13) 男 40 強佳	9.0 g (嘔吐)	3.0 g (—)				
	3 (10) 男 25 強佳	9.0 g (頭痛, 食慾減退)	9.0 g (—)				
	4 (4) 男 44 中中	12.0 g (—)	6.0 g (發疹紅斑), (顔面四肢)				
	5 (15) 男 35 中中	21.0 g (神經痛)					
追加例	1 男 29 強佳	1.0 g 1) 胃部に不快感, 嘔氣 2) 惡感發熱40° 3) 瀰蔓性發赤(顔面, 頭部)				食後50分服用 服用後1.5時にて左記症狀現はる。2日にて皮疹消褪(急全淋)	
	2 男 39 中中	3.0 g (熱感)	6.0 g 麻疹様發疹(軀幹四肢)			服用後3日にて皮疹發現, 翌日消褪	
	3 男 37 中中	5.0 g (頭痛, 下痢)				流行性感胃兼急性前頭蓋炎	
	4 男 59 虛不弱良	10.0 g (腎症痛, 減尿, 血尿)	12.0 g (全身浮腫, 血尿)			肺炎兼肋膜炎	

第1編第3群に於て胃腸障碍の見られしものは9.0g服用者3例, 發熱, 紅斑併發せしものは18.0g服用者1例, 神経痛見られしものは21.0g服用者1例なり。

追加例4例に於て胃腸障碍, 悪感, 發熱(40°C)に瀰蔓性發赤を併發せしものは1.0g服用者の1例, 熱感を起せしものは3.0g服用者1例にして, 本例は更に6.0g服用後麻疹様發疹が軀幹四肢に見られたり。頭痛, 下痢を起せしものは5.0g服用者1例なり(著者の1人石自身)腎痙痛, 減尿兼血尿を起せしものは10.0g服用者1例にして, 本例は更に12.0g服用せしめたる所, 無尿, 全身浮腫を來し, 重態となりたり。

第4章 總括並に考案

別表の如く23例共男性なり。年齢別より見れば21—30才間並びに31—40才間に最多數(共に8例)なり。次に多きは41—50才間なり。23例中體格強健, 榮養佳良なるもの10例, 其他は何れも體格榮養共に中等度のものなり(1例を除く)。これ副作用の起因は體格並に榮養の良否に關係なく患者の個人的差異(體質等)に因る爲ならんか。副作用と淋菌消失との間に一定の關係認め難し。即ち副作用が發現する例に於ても治療効果が殊更に悪しき事なきものの如し。

副作用初發時: 副作用は治療開始數時間以内に來る事もあり, 又數日後に來る事もある。余等の追加例(1)は1.0g服用後約1時間半にして副作用見られしものなり。而して余等のSulfapyridine治療に於ては治療第1日に(1.0—3.0g服用後)最早胃腸障碍, 發熱, 發疹の起りしもの3例, 治療第3日目に(6.0g服用後)胃腸障碍等起りしもの6例, 「トリアノン結晶」排出せるもの1例計7例あり。治療第4日目(9.0—10.0g服用後)に胃腸障碍, 頭痛, 血尿等併發せしもの8例あり。即ち「トリアノン」服用による副作用は大部分は第3—4日迄に見られるものにして一般にSulfanilamidの夫れより早期に發生するものの如し。

副作用と服用量: 土屋, 佐藤兩氏は「トリアノン」3.0g3日(計9.0g)投與せるものは多くは副作用なきも夫れ以上投與せるものは多くは幾許かの副作用見らる。即ち30.0g以上投與せるものに多く, 15.0g位にて輕き副作用見られるものありと。余等の場合にては副作用は6.0g服用者に6例, 9.0g服用者に7例あり, 而して1.0g服用者に1例, 3.0g服用者に2例見られたり。著者の1人石自身は5.0g服用後副作用を見たり。又逆に33.0g服用せるもの(第3表参照)に副作用なきものもあり。土屋, 佐藤兩氏も45g, 58g服用せるものに何等副作用なきものを見たり。これ副作用の發現は寧ろ各患者の個人的差異(體質等)が大に關與するものなり。勿論服用せる藥の多寡も一因をなすものなり。

再度藥物服用と副作用 Long, Bliss 兩氏はSulfanilamid 或は其の誘導體による中毒症狀が會て發現せる患者に於ては再度の藥物服用によつて更に重篤なる中毒症狀が發現するものなり, と警告を發せり。併し余等は6.0—9.0g服用時には胃腸障碍, 頭痛等起りし4例に於て再度投與(3.0—12.0g)せるに何等の副作用を認めず。これ第2回服用時刻が正確(例へば食後直ちに)に行はれ或は初回服用時に潜在せる個體の惡條件(例へば過勞, Vitamin缺乏食の攝取等)が改善された爲ならんか。余等の1.0g投與にて副作用起りしもの(追加第1例)は朝食後50分を経て服用したる重工業從業者なり。Bliss, Long 兩氏は本劑の副作用は個性の藥物反應にして, 肉體勞働が素因をなしVitamin缺乏を誘發すると。又酒精飲用が副作用(眩暈)を増強するものなりと述べたり。即ち副作用の發現は前述せる各患者の個人的差異(體質等), 服用藥量の他に, 其の個體の服用時に於ける種々なる生活狀態, 過勞, 飲食物, Vitamin缺乏等に關與するものならんか。

副作用の持續時間及び經過: 副作用は一過性の事もあり, 或は重篤にして而も長期に涉り逆に死を致す事もあり。藥物投與を中止すると共に急速に消褪し遂に完全消失するも

の(例へば軽度發疹)あり。余等の例に於ても大部分は投與中止後急速に消失せるも、中には種々なる加療を施して始めて消褪せるものもあり(例へば第2群第6例、及び17例等の如し)。即ち副作用の経過は上述せる個人的差異、服用量の外に副作用の種類に關するものなり。

副作用の種類： Sulfanilamidの夫れに類似して居る。副作用は1日5g宛を投與せる土屋、佐藤兩氏は29例中17例(58%)1日30g宛を投與せる余等は56例中23例(41%)にして兩氏の夫れより副作用の甚だ僅少なるは投與量のより少量なる爲ならんか。其の種類及び數を比較するに

	土屋, 佐藤	石, 大村
1. 胃腸障碍	13例 45%	22例 39.3%
2. 皮 疹	2例 7%	8例 14.3%
3. 頭 痛	7例 24%	6例 10.7%
4. 倦 怠	4例 14%	4例 7.0%
5. 發 熱	2例 7%	5例 9.0%
6. 血 尿	1例 3.4%	2例 3.6%

即ち皮疹、發熱、血尿を除く他の副作用は兩氏の場合に於て何れも可成り多きか、或は著しく多し。其他兩氏の1例に見られ余等の経験せざる副作用は兩氏の世界最初なりと自ら稱ふる米粒大の尿路結石なり。余等は只「トリアノン結晶」を見たるのみなり(1例)。而して余等が遭遇し兩氏が見ざりし主なる副作用は減尿、無尿2例、全身浮腫、「トリアノン」神經痛各1例なり。上記の副作用は同一患者に於て、其の何れか一つ、或は同時に2ヶ以上併有せる事の多き點は彼我相一致す。

1) 胃腸障碍は土屋、佐藤兩氏は45%を見たるも余等は夫れより可成り少し(39.3%)。Long, Bliss兩氏は食思不振、悪心、嘔吐はSulfanilamid及び其の誘導體の投與中に屢々見られる。悪心、嘔吐は該劑の局所刺激によるものに非ず、事實は中枢性のものにして、時に多き中毒症狀なりと云ふも、余等の

場合は食思不振の方が特に多きものの如し。又下痢を見ることあり。一般に下痢は悪心、嘔吐と共に來ると云ふ。余等の1例も嘔吐と共に下痢を來せるもの、1例は悪心、嘔吐と共に併發せず頭痛と併發せり。

2) 皮膚發疹、土屋、佐藤兩氏は7%を認む。余等の場合は14.3%(56例中8例)にして可成り高率なるを以て茲に皮疹に就て特記す可し。余等の1例(追加第1例)は治療開始後1.5時間、1例(第1群第13例)は數時間以内、1例(追加第2例)は3日目に見られたり。又數日後に發現する事あり。

發疹の消褪時、「トリアノン疹」の消褪迄の時間は3例(追加第1及び2例、第1群第6例)は1-2日、1例は4日、1例は6日なり。勿論其の種類及び程度によつて消褪に遅速あり。皮疹は單獨に來らず食慾減退を伴ふもの4例、嘔吐を伴ふもの3例、頭痛を伴ふもの2例なり。而して發熱(時には高熱)を伴ふもの5例にして最多數なり。發疹部位(第1編諸表参照)は限局する事もあり、又は全身に及ぶ事もあり。又痒感を伴ふ事もあり、時に落屑の見られる事もあり。尚ほ此の發疹は一般に癬痕を残さず完治するものなり。

皮疹の型はLong, BlissによればSulfanilamid疹の如く血管神經性浮腫、丹毒様、麻疹様又は猩紅熱様紅斑、紫斑、膿疱、蕁麻疹様なりと。而して其の發現率はSulfanilamidの夫れと同數なりと云ふ。土屋、佐藤兩氏は出血性多形滲出性紅斑様のものを見たり。余等は蕁麻疹兼痒痒性扁平疹兼點狀出血1例、瀰漫性發赤(猩紅熱様)1例、紅斑2例、麻疹様發疹2例を觀察せり。尚ほ既往に於て發疹を経過せる2例(第1群第6例、第2群第9例)に「トリアノン」1.0gを試験的に再投與したる所、1例は服用後1時間にして全身に瀰漫性發赤現れ(痒痒なし)、37.9°C發熱せり。他の1例は5時間を経て發熱(38.0°C)眩暈、頭痛來るも嘔吐なく、翌朝胸腹部、背部四肢に再び麻疹様發疹現れしが、生理的食鹽水400ccの2回注射により消褪せり。

發疹の経過： 余の場合は幸に凡て良好にして死亡せるもの1例もなし。

發疹發生機轉： 未だ闡明されて居ない。余等の例の發疹は露出部にのみ限局し居らざるも Frank は Sulfanilamid 疹が露出部の皮膚のみに發現する點よりして、彼は該藥により惹起せられたる光線過敏症が其發疹の主要原因ならんと云へり。Newman 及び Sharlit は Sulfanilamid が感光過敏化作用を有する事を實驗せり。この説を Brunsting も實驗的に認めたり。同氏並に Rimington は發疹患者の尿中に於て「ポルフィリン」量が相當増加する事に注目したり。尙ほ Rimington は發疹の發現に對し日光曝露が主因をなすものの如く Sulfanilamid の投與により生體內に感光過敏化色素が遊離して皮膚の發生を促し、又皮膚の感光過敏化によつて藥物性皮膚炎も發現し得るものなりと附言せり。余等の Sulfapyridine 疹を發せる患者の生體內にも同様の意味の感光過敏化色素が遊離するか否かは不明なるも感光過敏化と或種發疹とは確かに關連を有するが故に Sulfanilamid 及び其の誘導體を使用せる患者には必要以上の日光又は紫外線灯の照射に曝露せざる様警戒すべきものならん。

3) 頭痛： 土屋、佐藤兩氏及び余等の例には頭痛を起せるものは夫々24%、9%あり。之等の患者は發熱皮疹等を併發し居るも急性溶血性貧血及び其他の重篤なる中毒症狀を呈せず。

4) 倦怠： 土屋、佐藤兩氏の例には14%、余等の場合には7%ありたり。

5) 發熱： 土屋、佐藤兩氏は7%、余等は9%の發熱を見たり。又既往に於て本劑に因り發熱皮疹を來たせる患者に「トリアノン」1.0gを再投與せるに、上記せる如く再度の熱發疹を見たり。

6) 血尿等： 土屋、佐藤兩氏は「トリアノン」投與例29例中血尿を起せるもの1例(3.4%) (動物實驗に於ては15%血尿を見たり)ありと。余等の場合には56例中2例(3.6%)あり。Long 及び Bliss は Sulfapyridine

治療中血尿を併發せる數例を見、血尿と同様に殘餘窒素の瀧溜、腎障碍及び無尿を隨伴せるものありと云ふ。余等の2例に於ては1例は嘔氣及び腎障碍(尿中に赤球(卅))、6例は腎痙攣、及び減尿又は無尿を併發せり。この中毒症狀は腎細尿管又は腎盂に「アセチル、スルフアピリジン」結石が生成せられるに因るものなりと云ふ。余等の2例は共に結石を目撃し得ざりしも上記の症狀は恐らく結石によつて起りたるものなりと解して可なるべし。而して余等の場合は「トリアノン」結晶を見たるもの1例あり。土屋、佐藤兩氏は米粒大の結石の自然排出せるもの1例を見たり。兩氏は又「ラツテ」の實驗に於て20匹中50%に結石を見たり。

7) 神經痛： 土屋、佐藤兩氏は「トリアノン」神經痛を経験し居らざるも、余等の場合には1例あり。

8) 副作用と眼疾： Bucy は骨髓炎の少女に於て Sulfanilamid 錠劑1回服用(0.3g)後視神經炎に因る失明例を見、又同劑に因る一過性近視が多數報告され居るも、余等の例に於てはかかる眼疾1例もなし、尙ほ其他には「チアノーゼ」、「アチドージス」、肝炎、赤白血球障碍、精液生成障碍等の副作用あるも略記す。

副作用の豫防：

一般中毒の夫れに同じ。食後直ちに多量の水分と共に服用(胃腸障碍防止)、重曹と併用(「アチドージス」防止)。服用中は過勞を避け Vitamin B(神經炎防止)、Vitamin C(無顆粒白血球增多症等に對し)を攝取すること、酒精飲用を避ける事(酒精が眩暈を増強する爲)、必要以上の日光又は紫外線照射に曝露せぬ事(皮膚の豫防)、尙ほ血色素及び白血球算定を行ふ(顆粒細胞減少に對し)。發疹起れば其の消失後再投與する場合には患者の該藥感受性を檢する事(先づ少量0.3gの試験量(大人)を與へて見、24時間以内に反應が起らぬ時に始めて治療に着手する事)。

副作用の治療：

一般中毒の夫れに同じなるも、軽度の副作

用を見て直ちに投薬中止する要なきも、急性蕁麻疹及び浮腫性皮膚變化、急性貧血等發生せば直ちに投薬を中止する事。藥物を稀釋し或は排泄を迅速ならしむる爲に水分の強制多量補給、例へば生理的食鹽水、リンゲル、葡萄糖液を多量に注射する事。遊離「ヘモグロビン」の排泄を容易ならしむる爲に尿を鹵性に保持せしむる事。血液「ヘモグロビン」指數が60%以下に下降せる場合には輸血を行ふ事。其他對症療法(例へば肝炎の時には脂肪分少く糖質分多き食餌を與へる。又貧血には鐵劑投與の事)を行ふ。

第5章 結 論

1) 余等は滿4年間、岡山醫科大學皮膚科泌尿器科及び石の小院を訪れたる56例(大部分急性淋疾)に就き「トリアノン」1日3.0g連續服用後の副作用を観察せり。

2) 副作用は23例(41%)見られ、最多數は胃腸障碍22例(39.3%)なり。皮疹は8例(14.3%)、頭痛は6例(10.7%)、發熱は5例(9%)、倦怠は4例(7%)、血尿は2例(3.6%)、減尿及び無尿2例(3.6%)、腎疝痛、全身浮腫、「トリアノン結晶」、神經痛、膀胱緊張

感各1例あり。

3) 諸家の調査せし場合より皮疹特に多きが如し(微蕁疹兼癢痒性扁平疹兼點狀出血)1例、瀰蔓性發赤(猩紅熱様)1例、紅斑2例、麻疹様發疹2例。2例に試験的再投與(「トリアノン」1.0g)したる所、1例は1.5時間、1例は5時間を経て同様な副作用(皮疹、發熱等)再發せり。然れども「トリアノン」の再投與により再發せざる副作用(輕度の胃腸障碍、頭痛)もあり(4例)。發熱は諸家の擧ぐる Sulfanilamid 投與の場合と略同率なり。而して各種の副作用は Sulfanilamid の夫れより早期に發現するものの如し。

4) 尙ほ各種の副作用の發生は個體の體格並びに榮養の良否に關係なく、體質、服用藥量服用時刻、生活様式等に關係するものの如し。副作用發生と淋菌消失との間には一定の關係を認め難し。

5) 尙ほ治療効果の大にして、副作用も亦多き本劑の服用上の注意(副作用防止)と副作用に對する加療につき一考察を試みたり。

摺筆するに當り終始不一方御懇篤なる御指導と御校閱を賜りたる恩師根岸教授に衷心より謝意を捧ぐ

主 要 文 献

1) 土屋、佐藤：臨牀の皮膚泌尿と其の境域、第4卷。 2) 文部省化學局：「ズルファニールアミ

ド、化合物の實驗と臨牀 3) 石、大村：岡醫誌(第1編)

2.3 村落に於ける戦後の寄生虫蔓延状況について

岡山醫科大學細菌學教室

教 授	故 鈴	木	稔
講 師	木	下 武	男
助 手	稻	臣 成	一
助 手	俵	壽 太	郎

(昭和23年6月20日 第58回岡山醫學會發表)

I. 緒 言

戦後我が國に於ける生活程度の低下と衛生

思想の衰微とは相俟つて公衆衛生上の諸問題に大いなる陰翳を投じて居る。殊に寄生虫の